

内閣総理大臣賞（最優秀賞）・東京都知事賞

田んぼの水に思いをはせる

東京都

新宿区立西早稲田中学校 にしわせだ 二年

秋永 あきなが 橘香 きっか

「水」といつて私が一番最初に思いつくのは田んぼの水だ。まだ、幼稚園生だった頃、東京から田んぼや畑が多い地域に引っ越した。ここでは、父に連れられて何度も田植えに行った。田植えの仕方は農家のおじさん達が教えてくれた。水路や堰を管理する土地改良区という組織のおじさんだ。

田植えが終わると、生き物採集が待っていた。毎週毎週、長靴と着替えを持って出かけていった。おじさん達、地域の小学生と夢中になって、たも網で田んぼや水路をすくった。一緒に水路をすくった小学生とは不思議とすぐに仲良くなれた。捕った生き物を大きな桶に集めた。メダカ、ドジョウ、タモロコ、ギンブナ、スジエビ、水棲昆虫、桶に入りきらない大きなコイ、ナマズが捕れることもあった。私は、すっかり田んぼの生き物が好きになり、自分用のたも網、水槽を揃え、家族で生き物を探しに行くようになった。

稲刈りも終わり、冬が訪れた。少し寂しいと思いながら田んぼを見に行った。田んぼに水はなく、稲の切り株が寂しそうに残っていた。小鳥のさえずりがかすかに聞こえたが、生き物の気配は消え、静まり返っていた。

ドジョウが隠れているかもしれないと思い、水路の小さな水たまりを、たも網ですくってみた。ワア、思わず声をあげてしまった。網の中に、わずか二cm位の小さな鮒が三匹、ピチピチと跳ねていたからだ。小さな水たまりに身を寄せ、春を待っていたのだ。こんなに小さくても、一生懸命に生きている。そう思い、慌てて私は小鮒を水路に返した。小さな水たまりが小鮒の命をつないでいたのだ。私もまだ小さかったが、水が命を支えていることを強く感じた。

小学校二年生の時、再び東京に住むことになった。田んぼや水路からは遠く離れたが、そこでの楽しい記憶は鮮明に残っている。

田んぼの水に思いをはせ、人と水について考えてみた。一枚一枚の田んぼを潤す水は、日本人の命を育むお米を育てている。張り巡らされた水路は血管、田んぼをめぐる水は、まるで血液のようだ。人間の体では血液に肺が酸素を供給、肝臓が有害物質を分解、腎臓が老廃物を除去している。この他、心臓、胃や腸、多くの内臓が各々の役割を果たし、命を支えており、どれかが停滞すれば、病気になってしまう。

水も血液と同じだ。汚れたり、不足すれば、人間は生きていけない。田んぼの水も、雨水を蓄える森林、川、ダム、堰、水路、田んぼ、これらが、多くの人々の絶え間ない努力によって守られ、しっかりと役割を果たしているからこそ守られているのだ。

田んぼや水路について、知りたくなり、インターネットで調べてみた。血管のように張り巡らされた水路の長さは、四十万km、地球十周分に相当する。優しくしてくれた土地改良区や農家のおじさん達が昔から大切に守り続けてきたものだとなり、とても驚いた。

更に調べると、田んぼや水路は、お米を作る以外にも、とても貴重な役割を果たしていることが分かった。雨水を貯めて洪水を防ぐ、土砂崩れを防ぐ、川の流れを安定させる、地下水になる、水を浄化する、気温の上昇を緩和する、生物多様性を保全する、癒しや安らぎをもたらす。この多面的な機能が東京に住む私たちを含むすべての人々の生活を支えている。

田んぼの水はお米の中に蓄えられ、それを食べた人に吸収され、体が作られる。私達が安心して健康に過ごすためには、田んぼや水を守り続けなければならないと強く思った。

水のために私ができることには限界があるが、水を無駄にしない、油や汚い水を流さない、お米や野菜をおいしく食べる。最後に、田んぼや水を守る人達への感謝の心を大人になるまで持ち続けることを決意した。

優秀賞

「川の水のある意味」

東京都

新宿区立新宿西戸山中学校 しんじゅくにしとやま

二年

小坂 おさか 陽菜 ひな

「水」というテーマで、私の頭にふっと浮かび上がってきたのは、近所にある川だった。川の名前は「妙正寺川」。中井駅にあり、近所に住む人以外に知っている人は少ないと思う。見た目も「よくある川」で、引越してきて初めて目にしたときも、特に気にしていなかった。だが、この川は年に一度、多くの人の注目の的となる。

そのイベントは、毎年二月末頃に開催される「染の小道」。町中に染物が飾られ、様々な建物が彩り豊かになる、私の大好きなイベントだ。そして、その一番の目玉が、妙正寺川に飾られる染物だ。色とりどりの反物がいくつも川に架け渡され、風に吹かれてさわさわとゆれる様子は、いくらでも見ていられる程だ。職人が作ったものから保育園や小学校の子供たちが作ったものまであり、見ていてとても楽しい。私が昔通っていた小学校でも百人染めを毎年川に飾っていて、自分たちが染めたものが飾られているのが誇らしかった。そんな落合、中井の伝統工芸の染物が、なぜ川と繋がっているのだろうか。

その理由は、染物の染色で使う糊を洗い流す工程で、きれいな水が大量に必要だったので、川を利用することになったからだ。そのため、染色工房などの染色関連の店が、川に沿って次々と開業したそうだ。

だが、残念なことに昭和四十年以降、河川の汚染問題などが原因で、川を使うことがなくなっていた。今の時代、水道水を使えば「きれいな水」は、いくらでも出てくる。別に、わざわざ川の水を使わなくていいのだろうか。川のあちこちで、職人たちが自慢の染物を洗う景色は、かけがえのないものだったのではないか。今の年代を生きる人々は、その景色を知らない。このままでは、だんだんとその歴史は埋もれていってしまう。私は、それが悔しい。だから、そうならないために、私はこのことを沢山の方々に知ってほしい。染の小道を通して。

最近では、SDGsもでき、海や川にも目が向けられてきている。取り組みも増えてきていて、世界が良い方向に向かっていっているように感じている。このままどんどん目標達成に近づいていけると良いなど、染の小道の時期になる度思っている。

今年も、染の小道が開催される予定だ。地域の人から海外から来た人まで、沢山の人々が足を運び、商店街も活気に包まれる。妙正寺川に架かる橋では、多くの感嘆の声が聞こえることだろう。この素晴らしいイベントがこれからもずっと続きますように。また川の水で染物を洗う日常が戻ってきますように、と私は願っている。

入選

「伝統をつなぐ川」

東京都 新宿区立新宿西戸山中学校 二年

多田 希亜 ただのあ

私達の街、落合では年に一回「染の小道」が開催されている。妙正寺川に色とりどりの染物がかけられ、たくさんの人々で賑わう。一つ一つの染物にそれぞれの個性が感じられ非常に魅力的だ。

かつて、落合は京都 金沢と並ぶ日本の染物の三大産地の一つだった。しかし、昭和三十年頃、落合から染物は急に姿を消してしまった。落合にほかの産業が進出してきたという理由もあるが、もう一つの大きな理由があった。それは水の水質汚染だ。

昔は川にゴミを捨てる人が多かった。もう一つの理由に川で染物を洗っていたということが挙げられる。ポイ捨のゴミが、排水溝へ流れ込んだことや、橋の上からのゴミの投げ捨てで排水路を通じて、いろいろなところからゴミが川に流れ込んでいるからだ。わざとではなくても、お菓子の袋が風でとんで川に落ちることもある。また、染物を洗うときに出してしまうインクも川を汚す原因となる。そして、川を汚した結果、伝統は途絶えた。そこで、地域一丸となり、染物を復興させた。

そのため、今では染物を川で洗うのをやめ、百人染めにかえた。百人染にすれば、インクを乾かすだけであとは川にかけるのみとなり、悪影響は及ばなくなった。また、落合にある店舗が一つ一つのれんを作り、川に悪影響が出ないように対策をしつつ、来た人に楽しんでもらえるようにしている。その上、学校で誰でも体験ができるようにし、外国人なども集まるようになった。

ですが、また水質汚染の問題は解決していない。なぜなら、川のゴミが海まで流れ、海からどこまでも広がっていくからだ。海には多くの生き物が生息している。そこに流れ着いたプラスチックなどのゴミが広がると、生態系に悪影響を及ぼす。そうなれば、普段から食べている魚などのものも、食べられなくなる可能性がでてくる。そんなことが続き、悪化していったら、海に生きる生物だけでなく、人々もきれいな水を手

に入れることが難しくなる可能性が出てくる。地域によっては、もう、このようなことが起っている。

水が汚れる原因は、主に産業排水、生活排水、地球温暖化の三つだ。産業排水というのは、工場から排出される有害物質、生活排水というのは、普段の生活の中で排出される汚水だ。地球温暖化というのは、水が蒸発し、減り、植物プランクトンの増加が悪化し、水質の汚染につながっている。

水はこの世界に生きる全ての命だ。水から全てが生まれ、水で生きている。でも、そんな水を、私達が汚している。全く汚さない。というのは今の私たちには無理だ。だからこそ「水質汚染」という問題にもっと向き合うべきだ。今の私たちにできることは、生活排水を減らすことと思う。生活排水は一番私達の生活に近い。だから、私達にできることはあると思う例えば、揚げた後の油を流しに捨てないで、キッチンペーパーなどで拭いて捨てる。そんな些細なことでも、水への負担を軽減することがができる。だが、誰か一人だけでなく、皆がやらないと変わることはできない。だからといってあきらめずに、色々な人へ広げてく努力をして欲しい。その努力がいつか世界をより良くしているかもしれない。そう思えば、やってみる価値はあると思えるのではないだろうか。「やろう。」と思った時でもいいから、ぜひ、実践してほしい。

入選

「自然の恵みと日本の文化」

東京都

八王子市立打越中学校 うちこし

三年

岡林 おかばやし

勇気 ゆうき ラファイキ

父はインドネシア人で、私は小学二年生までインドネシアに住んでいました。美味しい食べ物と優しい人達に恵まれ、充実した生活を過ごせていました。けれど、家族とのお出かけの時に、何度も目にした光景がありました。それは、水路や川の水が白く濁り、お菓子のごみやビニール袋などのごみがたくさん捨てられているのです。川に限らず、海の波打ち際で人間が捨てたと思われるごみもたくさん集まっていました。まだ幼かった私にとってあの川や海は日常の光景に過ぎず、なんとも思っていないませんでした。それからしばらくしてインドネシアから離れる事になり、日本に帰国しました。そして、日本に着いた時、私は衝撃を受ける程の光景を目の当たりにしました。それは、川にはごみと思わしき物がなく、川の色も透明で石や魚なども目視できた程の透明度だったのです。始めは「この川だけだろう」と思っていたけど、今までに見てきたすべての川にもごみがなく、川の色も透明でした。なぜこんなにも日本の川の水は綺麗で美しいのか、私は調べる事にしました。

やはり、日本の川が綺麗なのは理由があります。実は森が関係していました。木が生い茂っている森には豊かな土壌があり、そこに微生物がたくさんいる事で、そこに降ってきた雨や水を浄化してくれます。雨や水が空から森、森から土壌へ通る事で、ミネラルなどの栄養価のある水が川に流れていくのです。そして、川から海へと水は流れており、必然的に海もきれいな水になっているのです。綺麗な川には森が関係しているとは思わなかったけど、日本の国土の約七割が森林と知り、日本の川の美しさは森が作っている物だと思えました。

川に限らず、日本の水が綺麗なのも理由がありました。それは、日本の徹底された浄化槽の仕組みがあるからです。トイレやお風呂などで使われた生活排水は、浄化槽へと流れていきます。そして、様々な微生物やシステムを使い、私達の元に届けられます。私はこの事を機に、水に

ついてもつと深堀りしたくなり、色々調べました。けれど、調べていくうちに胸が締め付けられるような出来事もたくさん出てきました。

アフリカの農村部では、水道や井戸がない所が多く、仕方なく子供に川や海に行かせて、水汲みをする人達がいいます。そうすると、子供は時間が奪われ、教育の場を失ってしまいます。それだけでなく、汲んだ水の安全性も悪く、健康面での被害も起きています。水によって、国同士の対立が起きてしまう所もあります。世界一長い川と言われるナイル川のダム問題やインダス川でのインドとパキスタンの所有権での対立など、解決していない所もあります。対立は国同士の紛争に発展してしまうと、人の平和が奪われてしまうのです。そして、皆さんも一度は聞いた事のある「地球温暖化現象」によって、干ばつが起きてしまう地域が増えたり、豪雨などの災害がたくさん起こったりと、あらゆる水問題が起きてしまっています。

日本で過ごしていると、水について不満や不便を感じたことのない人は多いと思います。それは、自然とうまく付き合いつながりながら日本の綺麗好きな性格と環境を守ろうとする文化、そして日本の技術があらゆる所で活用されているからだだと思います。この3つのポイントを抑えて、財政が乏しく、発展が遅れている国に学ばせる事で、地球全体を救う事に繋がる、と私は思います。そして、将来、世界中の誰もが安全に、そして安心して水を使える世界になってほしいです。